

「神われらと共におられる」

イザヤ書 第7章 10節～14節
マタイによる福音書 第1章 18節～25節

説教 岡村 恒牧師

「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。(23節)主イエスがお生まれになる何百年も前に、主の預言者イザヤを通して語られた神の約束です。インマヌエル、神われらと共にいますという言葉は、神によって計画され、預言され、実行された出来事の意味を明らかにします。

人間が思いついた神々といったものは簡単に滅び去ります。しかし、私たち人間とこの世界の全てをを創りになったまことの神が、この私たちひとりひとりと共にいて下さると聖書は明言します。これは驚くべきことです。神が私たちと一緒にいて下さる、ということが、具体的に、目で見、手で触れ、肌で感じる事ができるように実現しました。私たちには理解することができない不思議な、まさに神の業(わざ)、奇跡として主イエスの誕生が実現しました。あらかじめ預言者を通して約束し、周到に準備をして、神の計画が実行されました。

しかし私たちは、神の計画を受け入れるよりは、自分が理解できる範囲で、この世界をより良いものにして生きていこうとします。しかし神は、預言者を用いて、神の計画を、これから実現していく確かな出来事をあらかじめお伝え下さいました。

危機的状況の中で動揺するアハズ王の前で、預言者イザヤは神の言葉を語りました。アッシリア帝国という強大なこの世の力に信頼しないで、神に信頼して、神にしろしを求めなさい。とイザヤは語りました。ただ神ご自身に信頼を置いたら良いのだ、と語りました。しかしアハズ王は、最初から神に信頼することができませんでした。この自分を助けてくれるのは、アッシリア帝国の軍隊以外にない、と思っていたのでしょう。本来、ひたすら神にだけ信頼して歩むはずのユダヤの王アハズが、どうしても神に全身全霊をかけて信頼することができずにいました。アハズ王は、「わたしはそれを求めて、主を試みることをいたしません」という、一見謙虚な言葉で、神を拒絶しました。神など必要としない、神に命を懸けるようなことはしない、と言い張ったのです。ここに私たちは、自分自身の姿を発見します。

神は、求めない者に向かって、なおしろしを与える、と言われました。私たちが神を求めず、神に信頼できないにもかかわらず、神ご自身が決断し、実際に計画を実行して下さいました。神の深い計画、摂理(せつり)を、アハズ王も

私たちも、信じる事ができません。この私を救う計画があると聞いても、実際に目で見、手で触れるものに頼るのです。神に救いを求めなさい、と御言葉は私たちを招いています。

ヨセフとマリヤがベツレヘムに到着した時、そこには居場所がありませんでした。神の救いの計画が実現していくその夜、この世界には、神を受け入れる信仰がありませんでした。ほんのわずかな余地を作ることさえできなかったのです。神に信頼することができない私たちの姿を、この夜、聖書は描き出しています。

しかしこの、余地のない世界に神のひとり子が突入し、この世界を根底から変えてしまいました。最も小さな、弱い幼な子としてお生まれ下さった神のひとり子が、世界の片隅の最も惨めな場所にお生まれになりました。そしてそこで、「インマヌエル、神われらと共におられる」という神の約束が実現したのです。

主イエスは、天地を創造された全知全能の神と等しいお方でありながら、私たちと全く同じ人間となられました。すべてを捨ててこの世に来て下さったのは、私たちの罪をすべて背負い、私たちの身代わりとなってご自身をお捧げになるためでした。

神のひとり子、主イエスは、この世界のあらゆる出来事をご自身が味わい、罪を犯すことを除いて、全ての点において、痛みや悲しみをも味わい尽くして下さいました。いや、私たちの誰もが味わうことができない痛みを、主イエスは受け止めて下さいました。罪なきお方が、神に裁かれ、神に捨てられる絶望をすべてその身に引き受けて下さったのです。私たちが、この絶望を決して味わうことがないためです。

あの日、神は確かに私たちの世界のただ中に、一つのしろしを与えて下さいました。神のひとり子を与えてしまう、というこのしろしが、私たちひとりひとりの救いが確かであることを明らかにしています。誰でも、この神の救いの計画を信じる者は、インマヌエルが今ここで現実として響いていることを知り、味わうようになります。

「神われらと共にいます」。この言葉が、私たちの一日一日の歩みを支え、終わりの日を心待ちにする信仰を固くして下さいます。

(記 岡村 恒)